

日暮れて道遠き

国際理解

徳田 八郎衛 陸自61

1 プロローグ

わが街の国際交流協会創設に加わり、姉妹都市交流事業に携わっていた20年後には古参となり、副会長を仰せつかった。「副」は暇だろうと思つたら、さにあらず。所属機関の海外調査にも参加できなくなつたばかりか、1年後には会長が「後を頼む」。だが「貴殿ならこのややこしい会をまとめて行ける」という推挙には、怖い先輩の説教を披露して辞退した。

「幕僚として一生懸命やっているな。宜しい。だが独立した組織の長になれば改める。部下が困るのは頭の悪い仕事人間。喜ぶのは頭が良くして仕事しない人。頭が良くして仕事する人と悪くて仕事をしない人は中間。自分がどれか判るだろう」。その後、遠隔地の指揮官となつたが、「夜も仕事」の悪しき習性は改められず周囲は大迷惑。

「こんな者が会長になると周囲に迷惑。副会長として支えますから統投を」と懇願すると「その卓見も面白いが、それは少々クレイジーな指揮官が着任しても補佐できる幕僚機構あつての

話。そんな立派な事務局はないから仕事する会長でないと困ります。汗はかかず英語で挨拶するだけの人だと協会は潰れます」と泣きつかれてお受けしたが、創設後4年目に「幅広い市民の参加を得た活動」で国際交流基金（JEF）から表彰された我が協会の伝統を守らねば、という意欲もあつた。

大都市には市長が会長（我が街では名誉会長）、著名な大学の学長や企業の社長が理事や理事長、活動メンバーは専ら評議員という協会もあるという。半年後、他の協会から見学を受け、一人で活動の歴史・現状・課題を一気に説明したらお褒めを受け、「当たり前です。会長なのだから」と答えたら、「近隣の大都市では各ライオンズクラブ代表が回り持ちで会長となる。説明も市職員に依存する。貴殿は当たり前でない」とささやかれた。

公式の場でも綺麗な建前論に追従せず、いつも本音を吐くから確かに当たり前の会長ではなかつた。下番したのを機会にその幾つかを記し、国際交流活動への本誌読者の理解を深めたい。

2 ホームステイ

バブルがはじけ市役所の補助金も減り、創設当初に活躍したホームステイ部会も解体されていたので、新会長の初仕事はこれの再建であつた。以前は

ASEAN研修生が多かつたが、外務省招聘の南アジア高校生の宿泊を土日受けるようにしたら、プータンやモルジブといった珍しい国々なので会員に喜ばれた。市域が狭いからバスで到着した生徒たちを市役所から自宅へ連れ帰つても2〜3キロの移動だが、近隣町村を合併した広い都市では大変である。また、日本〇〇友好協会などが引き受けると、会員宅が首都圏に散在するから地震や台風の際は引率者も外務省も心配であるが、わが協会だとまとまつて泊まるから安心だし、山国の生徒は海辺を楽しんでくれた。

●生徒たちが到着するのは昼前だ。引き受け家庭を紹介し、軽食の懇親会へ誘う。準備してきた民族衣装に着かえて生徒たちも踊りや民謡を披露してくれる。ここにもお国柄があり、教育の場では歌舞音曲を忌避するアファニスタンの生徒たちは国旗を掲げて国歌を厳かに斉唱した。問題は、会長挨拶だ。下手な発音で誤解を与えぬよう和英両文の会長メッセージに国旗やマンガも加えて印刷配布する。そして「君たちの国ではこう言うが、日本では百聞一見にしかずと言います」と述べ、

「民泊一泊はヒルトン百泊に勝る」で結ぶ。中国高校生歓迎では、これに加えて「有朋自遠方來 不亦樂乎」と述べたら引率教師が感激し、演壇から生徒たちに訓示を始める。中国でも古典離れて困っていたらしい。

●子供にもいい経験だからと若い世代が競って受け入れてくれたが、「わが社は中国で酷い目に遇つた。中国人だけはお断り」という人も。そこで彼らの漢文の感想文を見せ、改めて協力を乞う。全員が日本人の礼儀、規律等を称賛するが、こう加える生徒もいる。「中国の大人は経済と技術を日本から学ぼうとしているが、それ以前に人としての在り方、生き方を学ぶべきではないか」。読んで涙が出た。

「それは同行の指導官たちの圧力で書いたのでは？」と問う会員もいた。リストラされた少将や大佐が教育省へ入り、付き添うのだ。そこで敦煌を訪れた帰路に西安の大学へ立ち寄り、陰の総責任者、国際交流担当官に訊ねると「中国共産党が、そんな恥になることを書けというはずがありません。生徒の本心ですよ」と裏付けてくれた。

3 嫌がることを押し付けない

在住外国人が増え、協会にも80年代の帰国子女支援に代わり、日本語学習支援や生活適応支援、災害時や医療時の言語支援（通訳・翻訳）が重要になってきた。和の精神を重んじるが故に長いものに巻かれ、「空気」に従うのを強制しがちな地域社会でも多様性

の尊重が説かれる。結構なことと思つていたら反発も出てきた。郷に入れば郷に従え、の同化論である。

●会長としてこれらの論客と同席する

と、その高言を放つておけないが、「オカミの方針です」と虎の威を借りるのは最低だ。戦時中、こちらがよそ者なのに占領地を日本に同化させようとして反発を招いた歴史から説き、同化ではなくホスト側も少し譲る統合の必要性を説く。しかし同化論者は、欧州製の「多文化共生」という新語がどうも気に食わないようだ。伝統あるホスト文化が「他文化」と同等・格下げになると感じるのだろうか。

私もこの新語は使わなかったが、「異文化の理解・尊重」は必要だし、米国やインドに学ぶべきだと公言した。インドはヒンズー教徒ばかりだと思つている人が多いが、実際はイスラム教徒、新田両方のクリスチャン、仏教徒と様々だ。ところが生活の場面で問題となるのは信仰よりも食生活である。インド陸軍の教育連隊で給食センターを訪ねると、ヒンズー、イスラム、ベジタリアンの3種類を準備している。「運搬食の場合は大変でしょう」と同情すると「この環境で幼時から育っているから平気です」との回答。「飲み物が色々あつても乾杯はビールで統一せよ」とテーブルマナーの講師が叫ぶ

日本では考えられないことである。●異文化と共生する今、「己の欲せざるところ他に施すことなかれ（論語）

顔淵第十二・衛靈公第十五）の徹底は、喫緊の課題であろう。これはヒンズー教にもユダヤ教にもイスラム教にもある格言で、聖書だけが「己の欲することを他に施せ」と肯定形になっている。古代から「多文化共生」で悩んできたからだろうか。同一民族で、今まで悩まなかった日本には無い格言だ。強いて探せば「わが身をつねて……」しか見当たらない。成果もある。中京地区で災害対処訓練への在住外国人の参加が少ないので国際交流協会が相談を受けた。調べると、配布される豚肉入りインスタントラーメンをイスラム系住民が忌避するためと分かり、それを改めると参加人数は急増した。

●ヘイトスピーチは論外として、相手の嫌がる呼称をわざわざ使うのも問題である。土民も室町時代には単にネイティブを意味したが、幕末や明治時代から蝦夷や南方の住民を見下して使い始めたから、わざわざ使うべきでなからう。使うのならドイツや英国に対して使うべきだ。一方米国では、スウェーデン系の人をスエッドと呼ぶの

に日本人をジャップと呼ぶといけないの？と聞く若者に、戦前の排日運動の頃に憎悪と軽蔑を込めてそう呼んだか

らイカンのだと教師は諭す。●「昔から支那と呼んできたではないか」も同様だ。戦時中だけでなく戦後でも「支那人みたいだ」が軽蔑的に使われていたのを学童だった筆者は忘れない。ところが戦時中に日本政府は、支那に代えて中国と呼ぶよう必死に指導している。それは汪精衛政権が中華民国の正統政権ということになり、米英に宣戦布告までしてくれたから「欲せざるところ他に施すなかれ」となったからだ。『幼年クラブ』でも在留華人の少年に「ぼくの国は支那ではない」と語らせた。手元に残る『同盟グラフ（同盟通信）』1943年8月号の解説「中国人気質」では、漢民族という表現以外はすべて中国・中国人であり、教養記事「日本の屋根」も見事に中国で統一している。この時期の全国紙も同様であるが、軍関係には威令が徹底せず支那派遣軍や北支といった文字が記事に踊る。

4 日暮れて道遠い国際理解

「もう国際交流ではなく、国際協力の時代でしょう」と揶揄されることは多い。日本文化を国外の外国人に伝え、海外の文化を日本に伝えるのを任務とする国際交流基金（JIF）の幹部も、「うちも同じことを言われます。組織を改編して国際協力機構（JICA）

の下部機構になれ、と言う政治家もいます」と苦笑する。●これは、相互の人的交流の増加、教育・報道の強化、ネットの発達で異文化・異文明の理解は十分進んだと思う人が多いからだ。ところがステレオタイプの教育や報道により、正しく理解されないことが多い。これは無知よりも有害なことがある。国内外の「良質紙」のご託宣が如何に危ういかは「トランプ報道」で明白になったが、大衆への影響力が大きいのは映像だ。NHKが公然と高視聴率を誇った「クローズアップ現代」にさえ問題がある。「出家詐欺」報道では過剰演出容疑で放送倫理・番組向上機構（BPO）の審査を受けたのだ⁽¹⁾。

本誌読者の記憶に残るのは、むしろ歴史認識問題であるが、キャスターの主観が反映するのは残念ながら避けられない。むしろデータが意図的に操作されている事態の方が深刻だ。「いま報道された事実とは本当だろうか」とい

いちいち疑つてかからなければならぬ

としたら、われわれの社会・世界に対する見直しはおおいに混乱し、日常生活も成り立たないであろう。（前記BPO報告から）

英語で世界に流されているだけに影響は大きい。これを生きた教材として日本を研究する生徒は多いのだ。ベト

ナム反戦運動や大学紛争の時期に7年間続いた「現代の映像」が、「ベトナム帰休兵」「15歳の自衛官」「日本兵器工業会」などを比較的公平に報じたのを知るだけに残念である。

●異国や異文化を語る講演会にも限界がある。講師が大使館員だと光と影の光しか話さない。中東の某国でドイツ人観光客が殺害された翌週、広報官の講演は専ら「○○いいとこ、一度はおいで」だった。日越友好も深まったが、日本国籍を取得して活躍する元ベトナム難民に講演をお願いしても、かつての「南」の窮状は話しにくい。親族が残っているからだ。

筆者が講師探しを依頼された際、在日40年のドイツ人ジャーナリストに「ドイツの戦後60年」の演題でお願いしたら、どんな政治の話に入っている。協会がJFと同様に狭義の文化に閉じこもり政治を避けていては、国際理解などできないという。最後は「ドイツは憲法を何度も変えた。日本も国論を二分する事項は後にして、さほど異論がない事項からどんどん変えていっては？」と結んでくれた。

●協会創設時から一向に理解が進まないのは、「ガイジンとは外国人というより異邦人、ヨソモノのこと。我々はむしろインド人、アメリカ人と呼んで欲しい」という在住外国人の訴えだ。

ジャップ、ニガーと呼んで迫害されるのとは違うが、出所が別だから仲間に入れてもらえないのも定住者には辛いと嘆く。筆者以上に日本人的な人も多いのだが。

●ステレオタイプの国際神話の一つに「日本に関心を持たせるツールは、専らアニメだ」がある。確かにアニメでしか日本を知らない若者も居るが、その逆は正しくない。同志社大学の佐伯順子教授（比較文化）がベルリン自由大学で接した学生の日本を知りたい動機は、神話、経済、技術と様々で、アニメを挙げたのは少数だった⁽²⁾。

隔年に米国の姉妹都市から訪日する高校生の「欧州ではなく日本を選んだ理由」も様々で、三島由紀夫に魅せられたからと記す生徒もいる。もちろん原宿の竹下通りも楽しいが金閣寺を見た時の喜びとは比較にならなかった、と訪日日記に記していた。

5 エピローグ

●協会が創設されて市からの初委託事業は、当市に似合う姉妹都市の選択であった。フロリダ州オーランドが姉妹都市候補の一つなので調査に派遣されたが、在日米海軍司令部の法務官が「向うに弁護士叔父がいる。貴官に是非会いたいそうさだ」という。ハーバードを休学し、水兵として海軍へ志



女生徒3名、西陣織会館着物ショーに登場許され大喜び

願。沖縄作戦では空母「バシカービル」が特攻攻撃で大破するのを目前で見たという。自宅へ招待され、開口一番「日本人は特攻を忘れないで下さい。あれがなかったら我々は安心して日本本土へ接近し木更津沖や紀伊水道に空母群を浮かべています。B29の盲爆ではできないピンポイント爆撃を艦載機で実施して鉄道網を破壊できます。米はあっても魚はなく魚があっても米はない。原爆以前に何千万もの国民が栄養失調で倒れたでしょう。そうならなかったのは特攻のお陰です」「無駄死だったとする評価もあります」「それは安全地帯にいる評論家の放言です。我々がどれほど怖かったか。もっと巧妙に集中して突入されたら発狂者続

出。沖縄作戦断念の可能性もあります」●その姉妹都市からの高校生たちが日帰り京都へ行き西陣織会館にも寄るといふ。一時間の泥縄訓練で3名を着物ショーに登壇させるよう事前に調整した。教師が適任者を選んだが、白人・黒人・ヒスパニックというパランスの取れた人選だった（写真）。今も感謝されるが、中国高校生たちの羨望の眼差しが忘れられない。いつの日か彼女たちも登壇させたい。

●いつも市長は、筆者を海上自衛隊OBとして紹介する。「陸軍は農村的、日本的。海軍は近代的、国際的」という戦前のイメージを今も引き継ぐ人は筆者の周囲にも多い。やんごとなき方に、この「国内理解」欠如を嘆いたら「アラ会長さん、国際貢献や国際協力だけでなく国際交流でも一番進んでいるのは陸上自衛隊ではないですか」という賛辞を頂戴した。夢ではないかと頬をつねった。

【参考資料等】

- (1) 2015年11月6日 放送倫理検証委員会決定 第23号 www.jpogr.jp/wordpress/wp-content/themes/codex/pdf/kensyo/.../2015/.../0pdf
- (2) 「究」2011年4月号、ミネルヴァ書房